

# カタルーニャ・クロッシング

カタルーニャと日本。人や企業、そして芸術、生活がクロスする現場を探ります。

## 第15回 鈴木 久雄 氏 建築写真家

# 「色温度が低く、暖色なのにコントラストが強い。 それが地中海の光です」

セルフポートレート 撮影2022年 鈴木久雄



**AMICS** この度は、サン・ジョルディ十字勲章の受章おめでとうございます。建築写真をメインで撮り始める前は大判カメラで料理の写真も撮影されていたと伺いました。

**鈴木** 学生の頃から大判カメラが好きで、音楽家カラヤン、小澤征爾両氏の写真で有名な木下晃先生の授業でずっと4×5判(シノゴ)のカメラを使った撮影に取り組んできました。高解像で鮮明な写真は料理写真に最適で、当時の「家庭画報」や料理関連書籍でその完成度の高さに驚嘆するばかりでした。アルバイトしていたプロラボで現像後に見られるそれらの写真は本当に美味しそうで(笑)。これならば4×5操作技術も活かせるし様々なジャンルの料理にも出会えると思い、料理写真で有名な箕輪徹氏のミノワスタジオにアシスタントとして入りました。

**AMICS** スペインへ来るきっかけとなったのはガウディでしょうか? スタジオワークから外光へ踏み出されるわけですね。

**鈴木** 1976年、細江英公さんが横浜市民ホールでガウディ建築物の写真を展示されたんです。その作品に感銘を覚え「ガウディ建築をリアルに見たい、触りたい」という思いを強く抱きました。当時の仕事は料理の写真撮影ですから時にはスペイン料理も撮るわけです。バルセロナに行けばガウディ建築もスペイン料理も本物に出会える。3年くらいかけて準備をし仕事も一区切りつけた1982年、25歳になる前にスタジオを辞めバルセロナに向かい切りました。はじめての海外旅行でした。横浜から船でナホトカへ行き、ハバロフスクまでは列車。そこからモスクワまで飛行機です。当時の若者に人気だったモスクバックです。モスクワからは陸伝いにユーレイルバスで北欧に入り各国を旅した後、ついにバルセロナへ入りました。その後2年ほど街を歩き、スペイン語を学ぶ間、以前付き合いのあった『家庭画報』の依頼でカタルーニャの祭りを取材撮影したり、自分で写真企画を作ったりして雑誌へ持ち込みました。当時はまだ大判カメラではなく一緒に日本を出た小型カメラ(ライツミノルタCLE)で撮影しました。1992年のオリンピックがバルセ

ロナに決まると日本の雑誌でも特集が増え、編集者らがバルセロナに取材に来るようになりました。そんな頃「お前がスペインにいるなら行くわ!」と師匠の箕輪さんが大判カメラを担いで来西してくれたのです。その上、帰る時には「これおいてく」とカメラとレンズ3本を残して…うれしかったですよ! 大判カメラが手に入ったわけですから。そこからさらに建築写真用のレンズを増やして、いよいよ得意の大判カメラで建築に向き合いはじめました。最初の仕事は磯崎新氏のバルセロナ・オリンピック室内競技場「パラウ・サン・ジョルディ」です。設計から完成までの5年間、全行程を4×5で撮影しました。これらの写真は磯崎事務所の公式記録として保管されただけでなく、スペインのメディアにも大きく取り上げられることになりました。



パラウ・サンジョルディ多目的室内競技場 撮影1989年 鈴木久雄

**AMICS** 世界的な建築雑誌である『El Croquis』と出会うのはその頃ですね。

**鈴木** El Croquisとの付き合いは86年からですね。当時El Croquisにクレジットされていたカメラマンの事務所を訪ねてフィルムやレンズをどうやって手配したらいいかを教えてもらいました。その後、私がEl Croquisの専属カメラマンになってしまい、残念ですがその写真家との関係は途切れてしまいました。同業者として仕事を取り合うような形になってしまったので…。El Croquisはその後30年間、私が一人で撮影してきたので、バルセロナだけでなく、スペイン中のカメラマンから随分風当たりを強く感じたこともありましたが、ただ、これはEl Croquisの編集長らが選んでいることなので、私のせいではないと割り切っていました。建築家らとの付き合いが増えていくと、料理写真をやっていたことが幸いました。建築家の人たちは食べるのが好きなんです。私は25歳の小僧でしたが日本食はもちろん、フランス料理や各国の料理についての知識もありましたから、こと食べ物の話になると一気に彼らとの距離が縮まりました。スペイン語はまずバルセロナに入るフランスからの特急列車内で1~10までの数字とセルベッサ(ビール)という単語だけ覚ええました。夏でしたから、まずは「セルベッ

サ!」これさえあればなんとかなると思いでしたね。それから自分の言葉でスペイン語を使って意思の疎通ができるようになるまで2年くらいかかりました。建築家の方は高等な言語形態で話すというか、難しい言い回しをするんですね。一方私のはバルや道端で覚えたスペイン語ですから、彼らの言っていることがわからない。「もっと簡単に言ってください。10歳の子供だと思って話してください」と幾度となくお願いするようなコミュニケーションでしたな。

**AMICS** ガウディ建築以外で読者にお勧めしたい建築物はありますか。

**鈴木** 私がガウディの次に興味を持ったのはモデルニズモ建築です。今でもたくさん残っています。ガウディ建築の出現につながった、あるいはその前後に存在した歴史の流れをどう写真で伝えていったらいいかな…と考えました。それが1988年に、建築雑誌『SD(スペースデザイン)』の「ガウディとその師弟たち」という特集号になりました。それと並行してガウディ研究室に通っていた日々の中で、ガウディがロマネスク建築様式に興味を持っていたことを知ります。これは見に行かねばと思い、ピレネー山脈山中に点在する小さな礼拝堂を訪ねることになります。素朴な、シンプルで、プリミティブな世界がピレネーの風景にホントにマッチしてるとです。この撮影をもう少し続けたいと思っていた矢先、美術出版社の季刊誌『みずゑ』から同内容の企画が舞い込んだのです。私は地中海沿岸から西へ向かってピレネー山脈のフランス側とカタルーニャ側を交互に取材しました。東から西へと移動して行ったイタリアの石工たちの軌跡に興味を持ったんです。EU連合からの助成が受けられるようになって以来、かつては廃墟のようなだったロマネスク教会も現在までにきれいに修復されています。道路も整備されたので、頑張れば日帰りもできてしまいます。スペインの中でもカタルーニャは特に、ロマネスク建築の遺産を文化資産として大切にしています。

**AMICS** 鈴木久雄さんという写真家にとって、バルセロナの空気、光、環境はどう映るのでしょうか?

**鈴木** ここは地中海沿岸の街です。地中海の光というのは太平洋とも日本海とも違います。これら三つを比べると色温度の違いが見えてきますね。バルセロナの街は暖色系の地中海の光が満ちているから多少の日陰も気にならない。一歩外に出れば光は燦々としていますから、鰻の寝床のように窓のない室内空間でさえ陰湿さは感じられない。それが地中海の光の色です。取材でラ・マンチャの内陸の光や、ポルトガルの大西洋の光で写真を撮った後でここへ帰ってくると、カタルーニャの光、地中海の光の色温度がとても心地よく感じられます。コントラストの強さ、カラーで撮る時の色温度の差の他にも、写真家にとって気になる違いはもう一つあります。それは緯度。オランダやドイツの日照時間と比べると、スペインは長いんですよ。それで、夏になると私たちは過酷な18時間労働を行うことにもなるのです。大判カメラを使用している、日の出から日の入りまで撮影して、終わったらホテルに戻って翌日のシートフィルムの装填作業…ざっと一日20時間働いています。ほんとに大変です。その上にスペイン人は食べるのが好きだから夕食はなかなか終わりません。(笑)。

**AMICS** ブリッকার賞受賞のカタルーニャの建築家集団RCRアーキテクトの作品も、鈴木さんがそのほとんどを撮影していますね。

**鈴木** 建築家の中でもRCRアーキテクトは特に個人的にも親し

建築誌『El Croquis RCR特集』表紙



くしています。彼らが大学を出てすぐ頭角を現し始めた時にEl Croquisの取材で1994年に撮影してからの付き合いです。彼らの地元オロットは海からもピレネーの山からも距離がある中間エリアです。イベリア半島では少ない火山地帯の町で、固有の植物も多く、季節ごとの風景の変化を求め19世紀末からバルセロナの印象派の画家たちが、好んで訪れたと言われてます。彼らが卒業した当時、オリンピック開催が決まっていたバルセロナで仕事を探すが多かったようですが、彼らはすぐオロットに戻って自分たちの活動を始めました。仕事の始め方からしてユニークなのです。建築作風としても自分たちの表現を大胆に構築する一方で、そうしなくていいところ、例えば「このドアは古いままでいいんだ」と思ったら最低限の修復を加えるにとどめる、そんな見極めが非常に素晴らしいのです。彼らの建築は新築の作品も面白いですが、修復しながら拡張したりした建物には、そのような特徴がよく現れています。

**AMICS** 今後の計画を聞かせていただけますか。

**鈴木** 秋から日本の設計事務所である日建設計によるカンパノウの改修工事が始まります。工事工程からの撮影を依頼されています。これは私がバルセロナにいる以上は是非手掛けたい仕事だと感じています。もう一つは先ほどのRCRアーキテクトのプロジェクトに関わる撮影です。2017年に彼らと共に京都、奈良の寺社仏閣を見て回りました。そしてそれらの建造物の素材である木材はどこから来ているのか、そのルーツを見に行こうと奈良の吉野町を訪ねたのです。その時の縁で吉野町から240年物の素晴らしい杉材が贈られて吉野町との交流が始まりました。RCRアーキテクトの所有している130haほどもある広大な土地の一角に、その吉野杉を使用した「紙のパビリオン」という名の作品が着工目前です。この建物は「La Vila」という全敷地を対象に進む大きなプロジェクトの一環として進行しています。私はその工程をドキュメンタリー動画として撮影しているのですが、RCRアーキテクトはそれを近年パリで行われる展覧会で発表する予定です。その撮影のために10月半ばにはまた吉野町を訪ねます。

**AMICS** 最後に鈴木さんにとってカタルーニャとは? お聞かせください。

**鈴木** ついにここへ住んで40年もの月日が経ってしまいました。もう日本は、帰るべき故郷というよりも、訪ねて行く場所になっています。日本に滞在していると1ヶ月くらいまではゆっくり過ごせますが、それを過ぎると無性にカタルーニャへ帰ってきたくります。その時身体は正直で、そろそろ豆料理を食べたいと言ってくるのです。私はカタルーニャ料理、プティファラ・コン・フディアスが大好きなんです。腸詰を食べる時に必ず横に添えられている白いんげん豆。オロットからちょっと山に入っていったところにSanta Pauという村がありまして、Los fesols de Santa Pau(ムンジェッタ・デ・サンタ・パウ)というのが小粒で一番美味しい白インゲン豆なんです。あれ、やっぱり料理の話になってしまいましたね(笑)。

**<AMICSの眼>**

4×5の判型にこだわって料理、建築に向き合ってきた鈴木さん。カタルーニャと日本のクロッシングが大きなフォーマットの上で浮かび上がってくるようです。カタルーニャ料理の話の続きもまたお聞きしたいです。(取材/文 原正彦)

### 鈴木 久雄

1957年生まれ、山形県出身、バルセロナ在住。1986年よりスペインの建築雑誌『El Croquis』の写真家として活躍。『a+u』紙(新建築社)でモノグラフが特集されたり、ニューヨークMOMAのコレクションに写真が所蔵されたりするなど、世界的に高い評価を得ている。磯崎新、SANAA、RCRアーキテクトなど、ブリッকার賞受賞建築家たちからの信頼も厚く、長年に渡って彼らの作品の写真、動画の撮影を続けている。2022年カタルーニャ州政府からサン・ジョルディ十字勲章を授与される。